

ヒューマニスト白井教授の真骨頂

秋葉 英則

お母さんの詩

山口弘子

しゃべらなくても 話しかけて
返事がなくとも 語ってやって
きっと きっと その声をおぼえ うなづく時がある

笑わなくとも ほおずりして
母のぬくもり つたえてやって
手足動かずとも
きっと きっと 動かす時がある

まちましよう まちましよう
手をにぎり 呼びましよう 呼びましよう
子どもの名前を

広い広い心で子の名を呼べば
ほら…聞こえたでしょう 母さんの声が
あったかーい あったかいでしょう
寝返りしなくとも まちましよう まちましよう
きっときます その時が

この子は 私をもとめている
呼びましよう 呼びましよう 子どもの名前を

おいで おいでの手まねきに
身体でしめした言葉は 胸にときめき
大きな 大きな輪をかいて 波紋のように

頭なでなで
肩よせて ゆらゆらしながら 進む
親子の姿です。

(山口弘子 寝屋川市あかつき・ひばり園『つばさだより』
第42号 1969 初出 拙著 1981 『乳幼児の発達と活動
意欲』 青木書店 pp.14-16)

この山口弘子さんの「お母さんの詩」こそ教育学徒白井教授のもつ研究教育活動の原風景をはぐくんできたものではないかと筆者はその思いを共有してきた。その大地こそが彼の実践研究をはぐくんだ大阪寝屋川市のあかつき・ひばり園にほかならない。その根底に彼の中にはぐくまれてきたニューマニズムの情熱あつてのことと評価している。もちろん情熱は一人の力だけであたため強化することはできない。そこに支えあう・育ちあう人々あつてのことである。筆者は白井教授と対面しているといつもいつも思いださずにおれない研究者がおるのです。その人こそ、白井教授と二人三脚で寝屋川市に障害児・者の発達を保障する公的条件を創りだした彼にとっての先輩である細川順正（現大分大学名誉教授）氏である。

筆者が大阪教育大学に在籍し時折ゼミの学生と共にあかつき・ひばり園をお訪ねし、お二方からご指導を頂いた日々を忘れることができません。

寝食を共にし、寝食を忘れてと表現してもオーバーでない程にお二方の障害児・者へのおもいは深く共鳴せずにおれない実践を次から次へと我々に提供してくれたものでした。

前掲の「お母さんの詩」は、そうした園の取組みに信頼をよせ、子どもの未来にロマンを描いて生きる母親のヒューマニズムの表現といえるでしょう。

いかなる分野でも創生期の歩みが後々の発展につながるのには、こうした人々をひきつけずにおかないヒューマニズムの営みあつてのことなのです。

筆者が学長として白井教授の退官に際して名誉教授の称号授与にふみきったこだわりの原点はここにあつたと記します。

本学の創生期にはたしてくれた白井教授の貢献は語り継がれていくことと信じます。

その一つは、介護福祉学科創生期の教職員の団結の礎をリードしてくれたこと。

二つは、ベトナム・サイゴン大学との学術交流を将来にわたって公的に続行する糸口を模索し、国際交流

の名に恥じない果実をもたらしたこと。

三つは本学の附属教育実践センターの将来を展望したビジョンの策定とその事業展開の方法についての知恵を生みだしてくれたこと。

他にももっと強調したいことがあります。ヒューマニストはとかく恥じらいを秘めているものですからこれらの強調でおゆるしをえたいと思います。

正直いって彼から退職の申し出をうけたとき、何故とうたがい再三再四、およびしては、その真意を聞く努力をしましたが、とうとう筆者が納得できる事由は発見できないまま、彼は、彼らしい人生の歩みの足跡を残して本学を去っていきました。

そこに彼の美学がありとみとどけています。

幸いにして本学の理事については継続いただけるとのこと、さらに本学の将来についても今まで同様建設的な努力をしてくださるとのこと故、学長としては、彼の退職は、失った人材ではないと確信しています。

本稿を閉じるにあたって、白井教授のこれまでに感謝し、これからへの期待を念じています。本当にごくろうさんでした。

(あきば ひでのり 本学学長)